

---

# ドキドキを君と\*°

波風緋色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドキドキを君と\*。

### 【Nコード】

N4109F

### 【作者名】

波風緋色

### 【あらすじ】

分かってたよ、好きになっちゃいけないって。でも君の優しさを知った時、もう目が離せなくなってたんだ…。少し冷たい秋と冬の狭間で生まれた一つの恋の物語。

## プロローグ

始まりは放課後、君に出会ったから。

触れられたところが熱を帯びた時私はこの気持ちの意味を知った。

好きです。

たとえ君に届かなくてもいい。

だから今だけ、好きでいさせてください。

## 1st・ドキドキは恋

学年首位を保つ為に私はいつも放課後一人教室に残る。

家に帰るとはかどらないし教科書を持って帰るとバックが重くて大変だ。

なので私はギリギリまで教室に残る。

高校に入って半年だが私はほかの女子と違って化粧などしてない。

興味がないわけじゃないけど自分はたぶん似合わないから。

ノートと教科書に目を向けるとノートに影が映った。

「偉いね、勉強？」

いかにも“軽い”という感じの声が聞こえて顔を上げる。

「…笠間君」

ワックスで固めた赤みがかった髪に着崩した制服。

笠間君は隣のクラスの顔立ちが良く、女の子にモテモテで有名な、私とは無縁の人。

だから私は特に気にせず教科書に再び目を向ける。

視界に笠間君が私の前の人の椅子に逆向きに座っているのが見えた。

「矢沢さんって真面目だよね」

背もたれに頬杖をつきながら彼が言う。

私が、真面目？

「真面目じゃないよ。」

好きだからやってるの」

だってじゃないと好きなのに出来ない人になっちゃっじゃん。

「うちの学年トップって矢沢さんでしょ？

好きなことに懸命になるのっていいね」

彼は笑って言った。

そう考えると、そうなのかな。

笠間君が何で私にそう言ったのかは分からないけど素直に受け取った。

その後彼は勉強している私に気遣ってくれたのか、私が帰るまで黙って見ていた。

「一緒に帰ろうよ」

私が帰る支度をしていると黙っていた彼が口を開いた。

「何で？」

誰かに誘われて帰るなんて久しぶりだ。

ましてや男の子に免疫のない私の心臓はその言葉に加速し始める。

「ホントは前から誘いたかったんだけどね。

女の子の夜道は危険だし」

彼は私からバックを奪うと自分のと一緒に肩にしまった。

「笠間君だって誰かを待ってたんでしょ？

彼女もいるって聞いたし悪いよ」

じゃなかったらこんな遅くまで学校に残っている意味がない。

それに彼女がいるって噂で聞いたし。

「彼女なんかいないよ」

キョトンとする彼に私は呆気。

「だって噂が…」

「噂と俺、どっちを信じるの?」

信じるも何も笠間君とは話したのだから今日が初めてだし。

でも笠間君は嘘を言っていないように見える。

「…笠間君」

恥ずかしくてうつ向きしていると髪を彼の大きな手で撫でられた。

「待ってた人がいたのは事実」

撫でていた手が止まる。

「じゃあ…」

「矢沢さん、待ってた」

屈託のない笑顔に心が揺れる。

なんか、彼がモテる理由が分かる気がする。

良い噂は聞かないけど、悪い人じゃないって思ったんだ。

歩き出す彼の隣を歩いていいのか悩んだけど勇気を出して一歩前に出る。

彼と同じ歩幅で歩いてみたいと思った。

地味な私が男の子と一緒に歩くなんで、今日が最初で最後だと思っただから。

「隣のクラスなのによく私の事知ってたね」

クラスに一人はいる地味な私。

女子とは交流があるけど男子とは疎遠の存在。

「何でだと思っつ？」

意地悪な顔をして彼は笑った。

ドキドキと鳴らす私の心臓。

「まだ、教えない」

柔らかく笑う彼のすがは茜色の空に照らされて綺麗だった。

鳴らす足音は同じ。

それが嬉しい。

今日知ったばかりの人にこんな感情を抱くなんて変だ、自分。

しかも相手は学校でも有名なモテモテ王子の笠間君。

想っ たっ て、 意味 ない。

なら 今日 だけ の 感情 に 浸ろ う。

「 家 まで 送っ て くれ て あり が と う 」

家 の 前 で、 家 まで 送っ て くれ た 彼 に 言っ た。

暗い から と 言っ て 結 局 来 て くれ た の だ。

「 じ ゃ あ ま た 明 日 ね 」

肩 に かけ て いた 私 の バ ッ ク を 渡 す と 彼 は 手 を 振っ て 帰っ て いっ た。

見上げると、夜空は珍しく藍色を背に星が瞬いていた。

一日だけの思い出。

だと思ってたのに。

今日も彼は放課後私の教室に来た。

昨日と同じように私の方を見ながら黙って頬杖をついている。

「笠間君今日は誰を待ってるの？」

視線に堪えきれず教科書やノートを閉じて言った。

彼は黙って私を見る。

お願い、見ないで…。

彼の行動一つ一つに反応してしまう。

彼の手が伸びて、私の頬に触れた。

ドクン。

波が来てドキドキが私を襲う。

「ほつぺたに消しクズついてたから…イヤだった？」

気兼ねする彼に私は答えられない。

触れられた、頬が熱い。

顔が、熱い。

優しすぎる彼が、いたい。

「ごめん私もう帰るね！」

気づいたらバック片手に走り出していた。

「教室に、筆箱置いてきちゃった……」

小さく呟いた言葉は、

誰もいない路上に響いた。

笠間君。

君の優しさがツライです。

彼が誰にでも優しいのは分かってる。

でもそれが、私にはいたいです。

電柱に背を預けて

冷たい風を避けながら

まだ雲がかっている夜空を見上げた。

「…っ」

カーンカーンカーンカーン

ザアア

電車の音が私を包んだ時、声を殺して泣いてみた。

笠間君が…好きです。

## 2nd ドキドキは傷

初めて知った。

恋はしよつと思ってるんじゃない。

恋は“落ちる”ものだ。

ある一定の条件がないと成立しない。

だからこの恋は神様がくれた私へのプレゼント。

でもこのプレゼントの扱い方が私には分からないんだ。

だから彼を傷つけてしまふ。

彼を好きになればなるほど、

私の“好き”の気持ちが彼の笑顔を壊してしまふ。

それは、イヤだ。

私のせいで彼に悲しい思いをさせたくない。

だから、さよなら。

もう、君には会わない。

日付が変わって朝になって、学校の教室に向かう。

何も変わらない教室を見てホッとした。

同じクラスじゃなくて、良かった。

どんな顔して見ればいいのか分からないもん。

椅子に腰をおろすと授業の準備をする。

あっ！

そういえば昨日教室に筆箱忘れたんだった。

机の周りを模索するがそれらしきものはない。

確か机の上に置いてたはずなのに…。

ほかの人の机の上を見渡したが黒い私の筆箱はない。

もしやと思い机の中を見るが紙しか入ってなかった。

…紙？

いつも教科書しか入れてない私の机の中に紙があるはずない。

プリントなどは教科ごと分けてファイリングしてある。

取り出すと真っ白な紙に黒い字で何か書かれていた。

“筆箱を返して欲しかったら

朝裏庭に来て”

簡潔に書かれたその字に見覚えはない。

一体誰が…。

ふと私は下がったままの前の席の椅子を見た。

…もしかして。

そう思った時には私は教室をでていた。

ありえない、ありえないけどもしかして

これを書いたのが彼だったら…。

ズキンと痛む胸を押さえて走った。

彼がこれを書いた意味は分からないけれど、

書いたのが君なら　　。

避けたい。

避けたいよ、君のこと。

だけど無理なんだ。

この体は私の君への想いを知っているから。

すれ違う人は驚いた顔をして見た。

そうだろう。

朝っぱらから紙を片手に走っているのだから。

こんなに必死に走っているのは、世界中探したって私ぐらいだろう。

地味な私が勉強以外に興味を持つなんて。

思わず笑みがこぼれる。

一日で変わったな、自分。

初めて人を好きになった。

恋に落ちたきっかけはドキドキ。

君が…好き。

「涼也喜欢な人いるらしいよ」

走る中、廊下で話している女子のそんな言葉が耳に入った。

“涼也”…。

笠間君の下の名前だ。

“好きな人いるらしいよ”

彼女の言った言葉が刺さる。

「えー？嘘じゃないのお」

“冗談でしょ？”とでも言う声。

「だってさっき一組の子が告ってそう言われたって」

私はうつ向いて足を止めた。

裏庭に続く階段を、下りずに上った。

もう、行く必要はない。

一段一段上る度にさっきまでの勢いをなくした。

期待なんかして、バカみたい。

“付き合ってる人”はいなくても、

“好きな人”はいただね。

一番上まで上って、その上へ通じるドアを押したがあいにく開かなくて。

気付いたらそのままうずくまっていた。

堅いドアと向き合って、しゃがんで膝に涙を落とす。

“好きな人いるらしいよ”

その言葉は私の体に刺さってドキドキと鳴らす心に傷をつける。

行き場のない想いが私に涙を降らす。

恋はしたいと思ってするんじゃない。

恋は落ちるもの。

だからこそ私には分からない。

どうすればやめられるのか。

どうすれば止めることができるのか。

神様。

できればこんなプレゼント、欲しくなかったよ…。

笠間君。

君の笑顔は、

誰に向けて放ったものですか？

ただ、好きなだけなのに。

想いが滲んで、うまく言葉にできないよ。

この気持ちは、どんな参考書にものってないから

私には分からないよ。

好きなっちゃいけないって

そんなの、分かってたよ最初から  
。

いたい、いたいよ。

心が悲鳴をあげる。

でもその対処法がわからなくて、

傷はどんどん深くなる。

君の好きな人は誰ですか？

できるならその人に私はなりたい。

“笠間君はかつこいいから多分大丈夫だよ”

今度会ったらそう言えるように、

君の幸せを願えるように。

今は一人にして。

思いつきり泣かせて。

窓から吹き出した風は秋の風なのか、冬の風なのか私には分からないけれど、涙に小さな波紋をつくった。

“好き”って伝える前に失恋しちゃった…。

手紙の呼び出しも、すっぱかしちゃった。

駄目だね、私。

一回の失恋でこんなに悲しくなるなんて。

二日前まで恋愛とは無縁の人生だったのに。

たった一日一緒に帰っただけで恋に落ちて、

相手はかっこいいので有名な笠間君で、

彼が好きって気付いたら失恋して。

これで、いいんだ。

タイムリミットだったんだ。

「好き…」

恋しくて、愛しくて。

好き。

好きです。

好きでした…。



### 3rd・ドキドキは涙

一時間目はサボってしまった。

優等生の私には初めての経験だったがほかの人に見せられるような顔ではなかった。

二時間目から普通に授業を受け、筆箱がないのでシャープペンと消しゴムは友達に借りた。

お昼になると友達の奈々子と中庭にでた。

お昼の中庭は私のテリトリー。

お弁当を持って毎日お日様の下でご飯を食べる。

「一時間目の体育大変だったんだよ」

玉子焼きに箸をつけながら奈々子が言った。

「体育って今バスケだよな？」

何かあったの？」

先生も若くて優しいし問題起こす生徒もいないはずだ。

「それがさあ、隣のクラスの笠間っているじゃん？」

アイツ機嫌悪くて試合が全然できなかったの」

“笠間”

彼女の口から出た彼の名前に心が揺れる。

機嫌、悪かったんだ…。

体育は二クラス合同でやるので一緒だ。

「何で…?」

玉子焼きをゴクンと飲むと奈々子に向き直った。

「お前のせいに決まってんだろ」

荒々しい息が耳元に吹きかかる。

持っていた箸がカタツと音をたててベンチの下に落ちる。

いるはず、ないのに。

彼が私を探すはずなのに。

何で

“お前のせいに決まってるんだろ”

何で声が聞こえるの？

「かざ、まくん…?」

目の前に見える自分を抱きしめる手。

今日は、会いたくないのに。

もう好きになりたくないのに。

抱きしめる手から逃れようと暴れると落ちそうなお弁当箱を奈々子袋に閉まってくれた。

「先戻ってるね」

奈々子は空気を察したのか私のお弁当箱の袋を持って中庭からいなくなつた。

中庭には笠間君と私だけ。

「逃げんな」

笠間君の低い声の中庭に響く。

笠間君はわかってないよ。

君のその優しさどれだけ私にとってツライものか。

笠間君は悪くない。

勝手に好きになった私が悪い。

笠間君は悪くない、のに。

「離して」

頭ではわかっているのに体が言うことをきかない。

「矢沢さん？」

抱きしめないで。

甘い声で私を呼ばないで。

「迷惑なの、放課後待たれるのも嫌なの」

思ってもない言葉が黒い感情にまみれて溢れる。

迷惑じゃない、放課後だって嬉しかった。

「だからもう関わらないで」

顔が乾いた笑みを浮かべる。

ごめんね、でも私こうしないとダメなんだ。

笑わないときつと笠間君の前で泣いてしまっから。

「…わかった。

今までごめん」

更に低い声を出して顔を見せないまま彼はいなくなった。

誰もいない中庭で、チャイムが鳴った。

同時に涙が出た。

… 太陽は、嫌なくらい照っている。

何で私は彼と出会ってしまったんだろう。

交わることのない平行線上で、

私達は何で出会ったのだろう。

数学みたいに答えが一つだったら解けるのに。

解くために必要な公式が私にはわからない。

国語の読解だったら文を読んでいけば大抵はわかるのに。

笠間君は複雑すぎて私には理解することができない。

英語だって単語がわかれば文脈でわかるのに笠間君のことはどんな単語でも言い表せない。

どんな辞書にもどんな参考書にも載ってない代物。

勉強だけが取り柄なのにそれですら意味がない。

黒い感情がとぐるを巻く。

告白ができるぐらい自分に自信があればいいのにそれすらできない。

そうすれば、キレイさっぱり忘れられるのだ。

「好き」

その一言が言えなくて。

臆病風に吹かれてる。

泣いてるのは何で？

笠間君が好きだからでしょ？

彼を傷つけないわけじゃないでしょ？

だったら彼と笑顔でさよならしなくちゃ。

何も、伝えられないまま終わってしまっ。

再び本鈴が鳴った時、私は授業に出なかった。

笠間君、私君を忘れられるように頑張るよ。

だからお願い。

私に思い出を一つください。

君と過ごした日々の

ドキドキを私にください。

ほかに何もいりません。

せめて私に恋をしたという証拠をください。

それだけでなんでもできる気がするの。

涙は流れるかもしれないけど笠間君の恋は応援するよ。

“ かつこいいから笠間君なら大丈夫だよ ”

そう言えるように。

酷いこと言ったから笠間君はもう私のこと顔も見たくない程嫌いになったかもね。

だけでももう迷わないよ。

笠間君が、好きだから。

また、君の笑顔が見れますように。

## 4th・ドキドキはKiss

帰りのホームルームで教室に戻った。

先生には奈々子が上手く言っておいてくれたおかげで何も言われなかった。

一日に何回も授業をサボったことなんてなかったのにやっぱり自分変わったんだな。

49

…笠間君に出会えて、変わったんだな。

そう思って少し苦笑い。

ホームルームが終わってどんどん人が教室からいなくなるのを見ていた。

笠間君が来ないのはわかってる。

そしていつも通り私は放課後教室に残って勉強する。

元通りの日常。

ただそこに笠間君の存在がないだけ。

ただ…それだけ。

ズキズキと音を立てる心臓。

心が痛むってこつこついうことを言うのか。

また知った新しい感情。

君がいなくても私の周りは君で溢れてる。

ただそこに君がない。

ただ…ただそれだけのこと。

いつかまた君のいない放課後が“いつも通り”になる日がくるのかな？

そう思って、泣いてみた。

「何で泣いてるの？」

頭上からくる少しかすれた声。

「な…んで」

目の前に見えたのは赤茶色の髪。

何で？

何で彼がここにいるの？

酷いこと言ったのに。

君を私は拒絶したのに。

「…俺矢沢さんのストーカーだから」

サラッと言うと彼はいつも通り私の前に座った。

ストーカー？

笠間君が私の？

「何で朝呼び出したのに来ないの？」

筆箱なきや放課後一人で勉強できないじゃん」

やっぱりあの手紙は笠間君だったんだ…。

「だって笠間君女子に呼び出されてたし、

好きな人いるって聞いたから…」

言えるわけないじゃん。

笠間君に好きな人いるって知ってショック受けてたからなんて。

「好きな人って…まだわかんない？」

じっと見つめられて思わず目を反らしてしまふ。

「わかんないよ」

笠間君と話し始めたのだって最近だし。

「目、閉じたら教えてあげる」

教えてくれるの？

言われた通り目を閉じる。

真っ暗な視界の中、唇に何か当たった。

こねって。

驚いて目を開けると視界いっぱい笠間君の顔。

「わかった？」

…笠間、君？

今のっていわゆる…。

「ぎ…すっ」

感触の残る唇に手当てる。

体温がすごい速さで高くなっているのを感じる。

「もっと矢沢さんとキスしたい」

私の頬を掴むと近づいてくる彼の顔に、私はそっと目を閉じた。

「目、閉じたってことは矢沢さんも同じ気持ちって思ってもいい？」

触れそうで触れない距離で彼は言った。

同じ気持ち？

そつだよ、私も君に触れたいって思う。

「笠間君のことが好きだから」

ガタッ。

転がる椅子とくっつく体。

痛いくらい強く抱きしめられる。

「笠間く……」

「俺今スツゲー嬉しい」

言葉を遮った彼は私の肩に顎を乗せた。

ドキドキと鳴ってる彼の心臓の音が聞こえる。

笠間君も、私と同じくらいドキドキしてる。

「俺も矢沢さんのことが好き。

ずっと前からいつも放課後見てた。

一人で頑張ってる飾らない矢沢さんのことがいつの間にかすげー好きになってた」

大事なものでも抱えるようにギュッと腕に力を入れられる。

放課後勉強してたの前から知ってたんだ…。

彼も私のことを好き？

ホントに？

嬉し過ぎて言葉にできない。

両想いだっただ。

好きが溢れて泣きそうになる。

「私も、優しい笠間君が勉強よりも大好きです」

内気で勉強しかできない私を見てくれた誰よりも優しい人。

「絶対離してやらないから」

もう一度触れるキスは君の味。

全て初めての私にドキドキをくれた君。

これからも、このドキドキを君と二人で感じていこう。

END\*。

#### 4th・ドキドキはKiss(後書き)

完結しました。良かったら私のHPにも小説があるので見に来てください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4109f/>

---

ドキドキを君と\*°

2010年10月28日06時24分発行